私たちはどこを目指して、何をやっていくのか

—研究, 計画, 実践をめぐる—

What is our study goal? What should we do in our study field?

A Discussion over Study, Planning and Participation

齋藤 雪彦*

Yukihiko SAITO

1 研究, 計画, 実践の概念整理

まず、本論考の主旨に従い、研究者（計画技術者）の立場から、研究と計画、実践について、その関係を整理しておきたい。本学会は計画学会を名乗っているが、計画学の研究とは、本来、より良い計画のためにあるはずだ。生活の実態を見る基礎的な研究や自治体の計画を比較する応用的な研究も含め、研究はより良い計画のために行われるものである。これに対して、現代の農村の課題を踏まえ、計画は、既往研究や個人的体験から得た方法論や知見を元に策定されていく。計画を立案する際には、現地調査や資料収集を行うので、その際に新たな研究課題や知見が得られることも稀ではない。すなわち研究を元に計画が行われることもあれば、計画の策定作業から新たな研究が始まることもあり、両者の関係は双方向的なものであると捉えられる。

実践とは、本来、「計画の実施」と捉えることができる。つまり、自治体や事業者による事業の実施という意味である。しかし、近年、住民参加の地域づくり（以下、地域づくり）が一般化し、むしろ、こうした活動を、研究者、計画技術者などの専門家が主導することを、実践と言う場合が多くなった。

既往研究を方法論や他者の体験として共有することで地域づくりを進めることはあっても、計画の策定作業の場合よりも、個人の経験を元にアドリブ的に進められる場面が多い。つまり、現時点では、実践を対象とする有効な研究の蓄積は少ないと言える（詳細後述）。

計画と実践の関係を見る。ある計画の実施のために地域づくりを行うことは、行政が主導するアライバイづくり的なワークショップなどにはあるかもしれない（例えば、ある道路を建設することは決まっているので、その是非は問えないが、この開発に伴う公園のデザインなど限定

的な部分について住民参加で行い、あたかも開発全体的意思決定に住民が参加したような印象を付与する手法）。しかし、住民参加の主旨である住民による意思決定の尊重という観点からすると、住民の意思で計画をつくっていくことも地域づくりの重要なプロセスと言える。つまり、多くの場合、実践には計画行為が内包されていると言える（法定計画やマスタープランではないかもしれない）。

同時に、地域づくりの実践を通じて、様々な調査や地域観察を行う中で、研究課題や知見の抽出が行われていくことも珍しくない。あるいは実践での活動を対象とする研究を着想する者もいる。つまり、実践から新しい研究や計画が生まれていくという側面もあるのだ。

これらの前後の関係について大きな矛盾はないと思うが極めて複雑な関係にある。「どうでも良い」と言う向きもあると思うが、私たちがどこを目指して、今何をやっていくのかという専門家としての立ち位置を確認することは大事なことだと考える。なぜなら、私たちは、より良い地域のために、絶えず、パラダイム（考え方の枠組み）を進化させていく必要があると考えるからだ。

2 研究者（計画技術者）としての立ち位置

—個人的体験の整理から—

周りの同業の仲間を見渡してみると、実践に重きを置く者、実態把握、理論構築に重きを置く者、自治体の計画策定過程への関与に重きを置く者など、その立ち位置は様々である。研究者の立ち位置は当事者の興味、能力や使命感といったものに裏打ちされるものであり、その優劣やあるべき論を論じることよりも、これらを俯瞰する視座を共有することで、互いの立ち位置や役割を認識し尊重するということに意味がある。とは言っても、私たちは様々な立場や異なる経験をして来っており、視座の

* 千葉大学大学院園芸学研究科 Graduate School of Horticulture, Chiba University

Keywords: 1) 計画, 2) 研究, 3) 理論, 4) 実践

共有も容易ではない。従って、筆者の個人的な研究活動での体験の中で、感じてきたことを述べることで、研究者の立ち位置を考える上でのいくつかの論点を示したい（以下の記述はあくまで個人の主観に基づく考察であり、自分の立ち位置が正しいと主張する意図はない）。

研究者として駆け出しのころ、学位論文において、空間を管理する実態から、空間管理に関わる理論構築を試み（研究）、これに基づく管理計画を提案した（計画）。しかし、一連の研究、計画を元に、いざ地域住民に提案し、実現しようとする（実践）、行き詰ってしまった。つまり、農村空間全体の管理をどう行うかは、自治体がコントロールできるものではなく、地域住民の個別的意思によるところが大きく、したがって、ある空間の管理を行うかどうかは個人の意思によるため、いわゆるマスタープラン型の計画には馴染まないのだ。この時、実践を意識しない研究・計画の難しさを痛感することになった。

その後、研究者としての職を得てから、この「絵に描いた餅」を反省し、兵庫県旧養父町、長野県高森町などで地域づくりにも関わるようになった。しかし、生活調査など調査・研究をやらせて頂くための基盤づくり（人間関係づくり）、いわば、ボランティアとしての地域づくり活動への参加という意識が強かった（だとしても、地域づくり活動への関与は、地域を良くするために真剣に取り組んでいたことは付記しておきたい）。つまり、自分がその時点で興味のある研究課題（空間管理や地域資源の活用実態など）と地域づくりで目指していくもの（グリーンツーリズムの推進）が対象地域は同じであっても並行して存在する状態であった。つまり、研究課題と地域づくりの接点を見つけようとするが、あくまで、自分の持つ研究課題から地域づくりの課題を解決しようとする姿勢である。この段階ではいずれの地域でもどこからか依頼があった訳ではなく、いわば「押しかけ」で地域づくりや研究を実施しており、このことは、自分の研究課題を温存しながら地域のニーズと並立させるという、ある意味ではお気楽な立ち位置を維持できた要因であった。

千葉県君津市では、地域住民から地域づくりを主導し欲しいとの依頼があった。そこで、地域づくりを始めるにあたって、地域の課題を住民らと話し合い、あるいは環境点検により抽出することとした。そこで出た農業・農地の問題については、土地利用調査や農家の跡継ぎ、職業調査を行い、コミュニケーションの希薄化やギャップについては、生活・余暇調査を行った。その研究成果は、適宜、地域づくりの場で発表を行い、住民に共通認識や危機感を共有してもらうことができた。言い換えれ

ば、地域づくりの中で、浮き彫りになった研究課題を調査・研究することとで、研究成果を実践へ還元していくという手法へと変わっていったのである。

実践に傾注する人からは、これらの調査やその考察も住民参加で行うべきだという意見も聞かれる。住民が地域づくりを進める力を得るという点では、多くの時間とエネルギーを投入する価値はあるかもしれない。しかし、研究者の専門的な知識に裏打ちされ、研究者により行われた調査・考察を分かりやすく住民に説明することも、研究の深度化とまちづくりの推進を同時に効率良く進める手法であると考えている。つまり、住民のエンパワメントと、地域の適切な方向性、具体的な目に見える成果とのバランスを、限られた時間とエネルギーの中で決定していくことが、実践のプロセスでは必要であるということだ。

また、君津市では、現時点に至るまでの7年間、地域づくり活動を主導し、これまで意識して来なかった地域づくりに関わる研究課題や知見を得ることができた。これを研究成果と言えるかどうかは別として（後述）、他地域での地域づくりに援用できる多くのノウハウを得たことは大きな収穫であった。

しかし、依然として、生活研究などの地域研究は進めるが（土地利用や生活行為など地域づくりに資する課題ではあるが）、地域づくりの進め方に関わる研究（地域づくりを対象とする研究）は行わなかった。

また、同時に、地域づくりの成果は、住民の手による散歩道の整備、その散歩道に花を植える活動、長命餅などの特産品の開発、キャベツや柿の都市住民によるもぎ取りイベント、市民農園の開設などであるが、自治体の計画とは独立して行われてきた。

現時点ではさらに、岩手県大船渡市での復興まちづくりに携わっている。ここでは、地元市議会議員からの依頼があり、3年ほど前から、月1回から2ヶ月に1回程度、地域の自治会連絡協議会をベースに復興会議を主催し、またワークショップを主催し、復興課題の抽出や検討を行っている（当初は自治体との関係はなく自主的に行う復興会議であったが、その後、大船渡市から申し出があり、復興会議に市職員が出席して頂けることとなった）。その成果として、①岩手県に対しては、防潮堤の方式を湾内式から湾口式へ改めるように要望書を提出し、口頭ではあるが了承されたこと、②大船渡市に対しては住民版復興計画を提言書として提出し、市の土地利用計画への反映を調整中であること、③復興朝市を開催し、復興への推進力としていることである。同時に、仮設住宅において、ヒアリング調査を行い、個人生活の復興過程を研究している。

ここでは、実践（復興会議・ワークショップの開催）が先にあり、これらの活動を通じて、復興課題の発見や復興計画理論を考察する（研究）とともに、自治体の復興計画への反映する（計画）という機会に恵まれた。つまり、実践からスタートし、実践から得た知見をもとに、研究、計画を行い、また実践へと還元する初めての経験となった。

ここに来て初めて、実践、研究、計画が、あたかも一つの機械を構成するそれぞれの歯車であるかのような、一体的に行うことのできる楽しさを感じている。

すなわち、理論構築のための研究からスタートして、研究と実践の並立を経て、実践、研究・計画を双方向から行う、あるいは一体的に行うという立ち位置の変遷があった。

3 立ち位置の選好と課題

ここでは、研究、計画、実践について、その醍醐味（私たちをつき動かすもの）を考えてみる。

実践の醍醐味は、住民にやる気が生まれ、地域が変わっていくこと、あるいは多くの人と一つのことをしていく一体感や人との交流の楽しさ、またはこうした結果に対して住民からの感謝されることにある。ささやかであるが、世の中を変えていく瞬間に立ち会う快感と言っても良いかもしれない（錯覚かもしれない）。

一方、理論構築のための研究（計画）の醍醐味は、捉えどころのない地域で起きている複雑な現象の形が見えてきたときの、知的好奇心や興味が満たされる発見の喜びである。研究者がどちらを選好するのかは、社交的な性格であるか等の個人の資質や志向もあるだろう。

筆者は実践でこうした醍醐味を味わいつつ、基本的には、実践を対象とした研究（地域づくり・住民参加の研究）をほとんど行わない。理由として、良く言われることではあるが、科学的再現性がないということがまず挙げられる。複雑な活動に影響を与えている変数が多く、特に活動メンバーや地域が変われば、その現象が再現できるのかという問題がある。また複雑な社会現象を捨象して単純化し、本質から離れてしまう危険性も伴う（例えば、地域づくりに伴う「地域への愛着」といった複雑な住民意識の変化を選択式のアンケートで求めるなど）。

一方かといって、多くの事例に共通するような視点に注目してしまうと、「多様な主体が関わってうまくいった」、「熱心なリーダーの存在が重要」など、一般的な文献学習を行い、半日の視察でわかる程度の知見しか得られない場合が多い。

つまり、研究とは、時間をかけて様々な諸点から検討する必要がある（あるいはそうした内容を伴うものであ

る）が、実践を対象とする研究ではそうした作業をするまでもなく体感、もしくは理解できる場合が多いのではないだろうか（全ての実践研究に当てはまるのではなく一般論として）。そこには「自己の知的好奇心が満足されるか」との判断基準も存在する。かつての恩師がゼミで良く言っていたことであるが、研究課題の設定の際、「研究するほど複雑な事なのか」という問いである。

実践に傾注する研究者に対しては、敬意を払うものである^{注1)}。膨大な時間とエネルギーを費やし、理不尽と向き合う強さを持ち、ある種の使命感を持っている方が多い。つまり、ここで問題にしているのはあくまで実践を対象とする研究の中身についてである。

現場での活動を生き生きと実践して、なおかつ研究者としてやむを得ず学術論文を書かなくてはいけない立場の方々に対しては、現場の報告を本学会の大会論文集において「計画・デザイン系」として発表できる機会は貴重であったと考える（都市計画学会では大会論文に同様のカテゴリーがあり、建築学会には技術報告集という場がある。）。言い換えれば、そこには、学術論文としての厳密な論証性よりも実践を評価する評価軸が存在している。

大学や研究機関がもっと（実践を対象とする研究でなく）実践そのものへの参加に対する正当な評価を与える必要があろう。さもなければ、科学的再現性のない、あるいは少し考えれば分かりそうな結論の、やむを得ず出された（本当は実践活動に専念したいと思いながら書かれる）学術論文が生産され、学問分野としての評価を失うことになる（例えば、筆者は若い頃に、他分野の同僚から、「（計画分野は）床屋談義の延長のようなものだけど、これからは大事な分野なんだよね。」と言った偏見を持たれ、お気軽に計画分野へ参入され、考察を述べられることを目の当たりにして、内心忤怩たる思いがあった。）。同分野の仲間からは、「実践の重要性を鑑みて、実践を対象とする学術論文としてのハードルを下げるべきだ」との声も聞こえてくるが、上記の理由から賛同しかねる。近年、実践に関わる研究者は、学術論文の提出も所属機関に求められていて、本来実践活動に使われているべき大切なエネルギーが毀損されているようにも思われる。

一方、実践から研究に対しても批判がある。研究は何十年も行われているが、共有すべき有用な計画理論が、一部の小さな範囲を除きほとんど存在しない。また、多くの研究者の関心事である地域づくりの理論化においても同様である。このことが、理論研究から手ごたえのある実践へと一部の研究者を転向させる理由となっている。実践に傾注する研究者からは「研究して、地域が良

くなるのか」との問いが発せられている。

すなわち、私たち研究者は、実践に資する地域研究、実践を対象とする有用な地域づくり研究を示すという学問としての生き残りに関わる重い宿題を出されている。

しかし、考えてみれば、実践に有用な体系的理論研究とは、青年研究者の多くに共通の目標だったのではない。体系的という言葉には懐疑的になったが、実践に有用な理論研究に向かい諦めず精進したい。また、研究、計画、実践を混同せず、なおかつ融通無碍にこれらを行き来するという思考、行動様式が今後の一つの方向性として考えられる。

Keywords: 1) Planning, 2) Study, 3) Theory, 4) Participation

注釈

- 1) 本稿における実践に関する理解と知見は、個人的研究活動に関わる体験に基づくものだけから得られたのではなく、筒井義富氏 (NPO チーム田援代表)、中塚雅也氏 (神戸大学) など多くの本学会員との対話から得られた。そういう意味でも実践に真摯に傾注する研究者に対して敬意を払うものである。

参考文献

- 1) 延藤安弘 (2010) : 「まち育て」を育む, 東京大学出版会.
- 2) 日本建築学会 (2012) : まちづくりの方法, 丸善出版.
- 3) 齋藤雪彦 (2015) : 農山村の荒廃と空間管理, 世界思想社.